

◆ もっと知ろう、世界遺産 第6弾 ◆

「武家の古都・鎌倉」の今

平成25年4月20日(土)、鎌倉生涯学習センター（きらら鎌倉ホール）で、高橋慎一郎さん（東京大学史料編纂所准教授）の講演が行われました。これに先立って、「第6回中学生作文コンクール」最優秀賞受賞者による『未来に残したい鎌倉』の朗読と、県立鎌倉高校生徒による『かまくら学』の研究発表がありました。

以下、高橋慎一郎さんの講演要旨です。

鎌倉の遺産としての価値

鎌倉の人を惹き付ける力はどこにあるのか。古い歴史を持つ寺社、山や海・谷戸などの自然、街が一体になり、静かな落ち着いた鎌倉の雰囲気を作りだしている。緑の魅力が大きな力を持っている。街の佇まいがいい。中心部は賑やかで楽しい雰囲気がある。海の幸も豊富だ。そして谷戸、谷の奥に開いている寺社は静かな雰囲気に包まれる。これがひとつにまとまっている。小さな中に詰まっているのが鎌倉の魅力である。三方を山に囲まれ、一方が海という鎌倉の地形を巧みに利用し、守り続けている。鎌倉時代からの建物等は少ないが、基本的な街の構造は鎌倉時代から変わっていない。それが鎌倉全体を世界遺産として登録しようという意味だ。

鎌倉の価値は、1180年代から1190年代にかけて、鎌倉幕府が成立したことにある。その後、室町幕府、江戸幕府と700年間、幕府が続いた。軍人の政権がずっと続いたというのは世界的に見て非常に珍しい。

関東の武士は自然の地形を巧みに活かして住みよく変えるのが得意だ。自然を大切にするという思想も残っている。鎌倉武士は、戦争を仕事しながら、魂の救済を願い、より自分の身近なところに寺社を作ろうとしたから、この狭い場所にたくさんの寺院神社を作っている。そのような武士の街づくりの結果として現在の佇まいが残っている。

都市のレイアウト／鎌倉の動と静

自然の地形を使って動の部分と静の部分を巧みに分けている。山に囲まれた中心部分、半円形の部分が平地で、ほぼ中心に若宮大路が位置している。その両側に商業活動の場所や、将軍の住む御所、武家屋敷を配置していた。谷戸の奥の山際には寺院や神

社、武家の別荘があった。若宮大路は現在でも鎌倉の中心になっていて、都市機能のなかで重要だ。中央に段葛があり車は通れない、現在でもちょっと不思議な静の空間を保っている。段葛は鎌倉の構造上、背骨の部分にあたる。静の空間が街の真ん中にあるというのは、中世都市の構造が現在に伝わっている証拠だ。

町は動、武家屋敷と寺社は静、鎌倉はこの大きな2つの空間から成っていた。町は町屋と呼ばれる小さな建物が並び、多くは道沿いに店を開いている。鎌倉時代の町としては、『吾妻鏡』に「大町、小町、米町、穀町、横町、魚町」があり、他の古文書には「甘縄の魚町」がある。寺社や武家屋敷では精神の啓蒙が求められるから、より静かな方に向かって展開していく。山際は最も静な場所であり、やぐらの中に五輪塔が置かれた墓などもあった。

鎌倉時代の音の世界、中世鎌倉の音

現在よりは遥かに静かな世界だから、音は強烈な印象を人々に与えていた。動の世界で一番印象的なのは、魚屋や米屋など商人の売り声、金の取りたての声も聞かれる。夜はあちこちで宴会をしていて、芸能の音も聞こえただろう。静の世界はお寺や武家屋敷だが、無音ではない。鎌倉時代には200くらいの寺院があったので、あちこちで鐘が鳴っていた。禅宗寺院では中国からきた僧や留学帰りの僧も多く、中国語で会話している。さらには山と一体化した町の雰囲気がある。実朝は郭公の声が聞きたいと永福寺まで出かける。郭公の声が聞こえる町として、鎌倉は作られた。音の世界を含めて、鎌倉の価値はある。

中世から続く鎌倉の佇まいを後世に伝えるために

鎌倉の佇まい、魅力的な空間を未来に伝えていきたい。文化遺産としての鎌倉を保存していくということだろうと思う。世界遺産は一つの価値基準に過ぎない。世界遺産にならなくても、鎌倉の価値がなくなってしまうわけではない。鎌倉の魅力を遺したいというのが、鎌倉を愛する人の共通の願いだ。住みたい街、静寂が保たれて環境のいい街でありつつ、訪れたい街の両方をぜひ追及してほしい。暮らす上で不便をつくるということについては、なぜそこまでしなくてはいけないのかという声もある。落ち着いた街の佇まいが、非常に価値があるということを知ってほしい。